

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

『博雅音』における重紐の対立について 附論：『博雅音』における音注の重層性

著者	季 鈞菲
雑誌名	神戸市外国語大学研究科論集
号	20
ページ	55-88
発行年	2017-12-24
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00002161/

『博雅音』における重紐の対立について

附論：『博雅音』における音注の重層性

季鈞菲

摘要

中古時代の文献資料在重紐問題的研究中尤为重要。本文作者以《博雅音》为对象资料，对早期重紐进行探讨。在总结前人研究的基础上，本文作者独立对《博雅音》中的音注材料进行了统计，并以音注材料的形式为基准，将音注材料分为了五类，分别考察。通过对音注材料的观察与统计，得到了以下四点结论。一，重紐反切中的 A 类，B 类切下字与切上字基本上分别与 A 类，B 类被切字对应。二，A 类字与中古四等字，B 类字与 C 类字的合流已经开始萌芽。三，《博雅音》的重紐类型可以归为中古早期(但归类理由与李秀芹 2006 的原则不尽相同)。四，《博雅音》中的重紐类型与《玉篇》相似度较高，但与《文选音义》在反切的构造方式上存在差别。此外，在兼论部分，本文作者还通过五个论据，提出了《博雅音》中的音注存在内部分层的假设。通过此次研究，一方面补充了对《博雅音》本身的研究；另一方面，为重紐问题的历时研究提供了参考。

§0 はじめに

重紐現象は『広韻』の研究において最初に発見されたものであり、清代の江永らが漠然と認識して以来、様々な研究者が様々な方法で幅広い資料を用いつつ、全面的に討論した。結論の一つとして、いわゆる重紐というのはただ一時あるいは一地点の現象に留まるものではなく、古代中国語における通時的かつ全体的な現象であるというものがある。しかし、この現象は現代中国語(方言・官話を含める)において体系的に保存されていないため、我々がその変化の実相を研究する際には古代の資料が極めて重要な地位を占めることを認識せねばならない。

本稿ではその通時的研究の一環として、隋の曹憲が著した『博雅音』を対象資料とし、その中の重紐三等韻、純三等韻、純四等韻の反切、直音音注を抽出して、『博雅音』における重紐の対立を考察する。考察を行う際に、音注を体裁によって分類する観点をご指導くださった神戸市外国語大学の太田斎氏からご教示いただいたものである。

§1 資料と作業仮説の紹介

まず、『博雅音』という資料及び音注処理の作業仮説を紹介する。

1.1 『博雅音』とは

『博雅音』とは、隋の曹憲が魏の張揖の『広雅』¹に施した音注である。もともと独立した書物の形式ではなかったが、清の王念孫が『広雅』を校訂する際に本文から分離させ、一冊としてまとめて『広雅疏証』の後ろに付けた。本稿では畿輔叢書所収の王念孫校訂本を底本として音注を採集したが、必要に応じて他の版本も参照した。

『博雅音』の成立年代は605年～618年の間の13年間と推定され、610年に成立した陸法言の『切韻』より約10年遅れる。²そして、性質、体裁及び編纂の目的は、全て『切韻』と異なる。また、音韻体系では、「因論南北是非、古今通塞、欲更摺選精切，除消疏緩」（日本語訳：そこで南北の是非や古今の通用を論じ、更に適切なものを選び取りいい加減なものを取り除こうとした…）³である『切韻』と異なり、『博雅音』は南方讀書音体系であると指摘される。⁴まとめて言えば、『博雅音』は『切韻』と成立年代は近いが、性質、体裁、編纂の目的及び基礎となる音韻体系が異なる資料である。この意味では、重紐現象の通時的研究には、『博雅音』はかなりの価値があると言えよう。

1.2 作業仮説

『博雅音』における反切は「某某反」と「某某」のような二種の体裁が見られ⁵、直音は「音某」、「某音」及び「某」のような三種の体裁が見られる。これについて、董忠司1973は以下のような解釈を挙げている。

中国語原文：博雅音反語多省言“反”字，曰“某某反”者百僅一二，尤以卷一發端諸字為多，後九卷中，“反”字亦每見於卷首而略於卷中，蓋蘊發端示例之意焉。

¹ 隋煬帝の諱である「広」を避けるため、『博雅』と改められたが、避諱の期間が過ぎた後に、元の名称に戻された。但し『博雅音』の方は『広雅音』と呼ばれることは無い。

² 丁1995から引用。

³ 遠藤光暁「切韻の韻序について」『藝文研究』54、pp.312-299、慶應義塾大学藝文学会、1989年3月；後『中国音韻学論集』、pp.98-118、白帝社、2001に収録。本稿の日本語訳はこれより引用。

⁴ 呉2006は、『博雅音』の基礎音系は紀元6世紀末～7世紀初め金陵讀書音体系であると指摘しており、本稿もこの説に従う。更に厳密に言えば、金陵、揚州を中心とする南方讀書音体系である。

⁵ 王念孫以前のテキストでは「某某切」も現れるが、王念孫はこれを一律「某某反」に改めているので、本稿では「某某切」は議論の対象としない。

日本語訳：『博雅音』の反切は多くが「反」の字を省いていて、「～～反」となっているものは百のうちに一つか二つしかなく、特に巻一の巻頭の多くの字に顕著であるが、以後の九巻では「反」の字(の反切)は(主に)各巻頭に見られ、間々中間部分に見られることもあるという程度である。だから(「～～反」という反切には)恐らく巻頭で例示するという意味合いがあるのだろう。

要するに、氏の説では「某某反」を「巻頭で例示する意」と認め、「反」のない「某某」と同一視する。

この指摘について、筆者は異なる理解を持っている。筆者の考察によれば、「某某反」とする反切の第一巻～第十巻に現れる回数はそれぞれ 88、26、18、10、37、41、20、31、14、24 である。また、各丁における第一行から第十行までの各行で現れる回数の総計はそれぞれ 24、23、26、26、37、36、27、37、31、42 である。但し各巻の丁数は一様ではなく、例えば第一巻は 6 丁、第二巻と第三巻はそれぞれ 4 丁、5 丁というようにバラツキがあるため、比較の基準とはしにくい。各巻と各行に現れる回数について言えば、「某某反」とする反切は第一巻で一番大量に現れているものの、後の各巻にも分布している。そして各行での分布は均一的である。従って、筆者は「巻頭で例示する意」というよりも、むしろ「「某某反」とする反切は「某某」とする反切と元々由来が異なる」と仮定した方が相応しいと考える。⁶この仮説に基づいて、本稿では体裁別に『博雅音』における全ての音注を以下の五種に分ける。

類	体裁	音注例	数量
ア	某某反	印，於信反；闇，魚斤反；	309
イ	某某	窺，苦垂；緊，居忍；	2974
ウ	音某	倚，音寄；礪，音廉；	43
エ	某音	諛，毀音；隙，斂音；	62
オ	某	褻，蹇；裨，卑；	2082

表 1 体裁別音注統計

「一字多音」の場合でも、以上の作業仮説によって計算する。例えば、「爆，布角普角歩角」という音注は、イ類の反切が 3 つ並列されたものとする。このような算出方法によって、本稿では総計 5470 条⁷の音注が得られた。

⁶ 同一の資料に異なる体裁の反切が共存するものは他にも発見されている。例えば、敦煌出土の『毛詩音義』、『礼記音』などである。

⁷ 各先行研究の統計数値は異なり、董忠司 1973 は 5139 条、丁鋒 1995 は 5072 条、呉波 2006 は 5516 条、雷昌蛟 1999 は 5203 条とする。その原因は、「一字多音」、誤字、脱字に対する処理の違いにあると考えられる。

§2 考察の範囲と単字音表

以下、本稿で考察する重紐韻の範囲と『博雅音』における重紐字の単字音表を紹介する。(単字音表は付録を参照する。)

2.1 考察の範囲

周法高 1989 は、「いわゆる重紐というのは、『切韻』系韻書の中で、同じく三等に属する(同一韻中の)唇牙喉音声母小韻に(声母を同じくする)二種の反切があり、それを『韻鏡』、『七音略』などの早期韻図では、(一枚の転図において)その一方を三等の欄に置き、一方を四等の欄に置く現象である。」のように重紐を定義した。⁸しかし、重紐現象はただ『切韻』系韻書の中だけで発生するのではなく、『玉篇』、『慧琳音義』、『蒙古字韻』など様々な『切韻』とは異なる音韻体系を反映する資料の中でも現れている。また、重紐韻の範囲も研究者によって意見が相違する。伝統的な研究では、重紐の対立は支、脂、祭、真(諄)、仙、宵、侵、塩という八つの韻の唇牙喉音声母の下で発生すると考えられてきたが、先行研究を総合して、本稿では以上の八韻以外、「庚三-清⁹、幽、蒸¹⁰」の四韻も考察の範囲に含める。他方、云母(匣三)と以母の対立は重紐の対立ではなく、韻図では見かけ上重紐の対立と同じになっているに過ぎないものとして、本稿では重紐韻声母から除外する。

つまり、本稿では『切韻』(一部『集韻』)の支、脂、祭、真(諄)、仙、宵、侵、塩、清-庚三、幽、蒸という十二韻の対立があるとされる唇牙喉音声母(云母、以母を除外)小韻所属字を重紐韻の考察範囲とする。¹¹考察の結果は表2のようになる。

体裁 重紐	ア類	イ類	ウ類	エ類	オ類
A 類	10	114	0	3	61
B 類	8	167	1	5	97

表2 体裁別重紐音注統計

⁸ ()内の字句は厳密さを期して筆者が加えたもの。従来の研究では、三等の欄に置かれるのを重紐B類(または乙類)と呼び、四等の欄に置かれるのを重紐A類(または甲類)と呼ぶ。

⁹ 管見の限り、最初に庚三韻と清韻が一体となって一つの重紐韻に相当することを指摘したのは辻本 1954 である。しかしこれについての議論は全く無く、重紐韻のリストに並べられているだけである。詳しくこの問題を論じたのは佐々木 1983(pp.392-438)及び太田 2012(pp.180-184)である。

¹⁰ 平山(1972)は、蒸韻は唇音はB、牙喉音合口はBで、牙喉音開口はCという変則的状況を示していると指摘する。

¹¹ 平声を挙げて相配する上声、去声、入声韻を兼ね表す。去声のみの韻はその韻目を挙げる。

§3 先行研究

『博雅音』の音韻体系、体裁及び版本などの諸問題に関しては、既に豊富な成果が挙げられている。しかし、重紐現象については、まだ検討の余地がある。本節では、『博雅音』における重紐の対立に触れた先行研究を紹介する。

3.1 黄典誠 1986 と丁鋒 1995 の研究

中国において、黄典誠 1986 は『博雅音』の音韻体系を考察した早期の研究の一つである。しかし、その目的は『博雅音』を傍証として『切韻』の音韻体系を究明することにあるため、『博雅音』における音注を分析する際に『切韻』と同じ部分のみを用い、異なる部分を無視した。そのため、音注の統計としては不完全の虞がある。

同論文の第3章第2節第5部分では「重紐」を論じている。方法論から言えば、黄氏は歸字の重紐帰属は反切下字によって区別されると主張し、考察の対象を下字のみとした。そして、重紐の解釈について、黄氏は重紐の本質は「重紐事實上是一個只具唇牙喉聲組的獨立韻歸並於一個唇舌齒牙喉五音具備的大韻裏的結果」¹²(日本語訳：重紐というものは実は一つの唇牙喉音声母字しか持たない独立韻がもう一つの唇舌齒牙喉音声母字を全部備える大韻に合併された結果である)(p.73)と主張している。黄氏はまた「一般來說，凡反切下字其聲母不出唇牙喉聲組的範圍的，是為重紐三等，反之，凡反切下字聲母不受唇牙喉的限制的，是為重紐四等」¹³(日本語訳：一般的に言えば、反切下字の声母が唇牙喉音声母の範囲を超えないものは、全て重紐三等(本稿で言う重紐B類)であり、それに反して、反切下字の声母が唇牙喉音に制限されないものは、全て重紐四等(本稿で言う重紐A類)である)(pp.72-73)とも指摘している。しかし、筆者の調査によれば、『博雅音』における重紐B類歸字の反切下字は唇牙喉音声母のものに限られることなく、舌歯音声母のものも存在する。従って、黄氏の説はなお検討する必要があると考えられる。また、すでに指摘したように、黄氏は『博雅音』における『切韻』と同じ重紐の対立状況を論じたものの、『切韻』と相違する対立状況については捨象した。この点についても、更に検討する必要があると言えるであろう。

丁鋒 1995 は黄 1986 より詳細で確かな音注資料に基づいて『博雅音』の音声体系を考察した。同論文の第二章第四節で「重紐」についての議論を行っている。しかし、黄典誠 1986 と同様に、丁鋒 1995 も反切下字を中心に考察してい

¹² 黄氏の説は黄典誠 1986 「曹憲『博雅音』研究」、pp.72-73 から引用。

¹³ 注 12 に同じ。

る。また、重紐の本質について、丁氏は黄氏の説を継承して、その区別を「上古音声部と韻部の不均等な発展の結果」であり、重紐三等と四等はそれぞれ「強声弱韻」（声母が強く発音され、韻母が弱く発音されるタイプ）と「弱声強韻」（声母が弱く発音され、韻母が強く発音されるタイプ）であると指摘した。

結論として、1. 重紐の両類は明白に区別されている。2. 支韻と脂韻は双方とも重紐の対立を保ちながら、二韻の間に A 同士、B 同士の合併が見られる。3. 重紐三等は非重紐三等（本稿で言う C 類）と混同が見られ、重紐四等は純四等韻と混同が見られる、という 3 点が挙げられている。

まとめて言えば、両氏の研究は考察の目的と音注処理の方法が異なるが、結論は信頼性が高く、参考価値が高い。但し、研究の主眼が重紐問題にないこととその当時においては重紐についての認識がまだ不完全であったため、両氏は重紐帰字と下字の関係だけに絞って、重紐帰字と上字の関係を無視している。また、舌歯音声母字についての研究もなお不十分なところがあるため、我々が改めて検討する意味は十分にある。

3.2 大島 1985 の研究

日本では、大島正二氏が 1984 以降、一連の論文において『博雅音』についての考察結果を報告した。最後の一編である大島 1985 では拗音甲：乙、即ち重紐 A 類：B 類の対立について考察を行った。結論として、次の 2 点が挙げられている。1. 拗音甲：乙の対立は、ごく少数の事例に混同が見られるものの、基本的には明確であったと認められる。2. 『博雅音』における重紐韻の甲：乙の対立は帰字と上字との関係に於いても明確であると認められる。

この二点は正しく『博雅音』における重紐対立の実相に適合している。しかし、大島氏の論文は専ら資料整理の結果報告を目的とするものであり、これによって音韻的特徴をいちいち論ずることはしなかった。¹⁴重紐についての更なる検討は残された問題の一つである。

以上、三氏の先行研究を概観した。本稿との相違点を以下の 3 点にまとめることができるであろう。

1. 視点が異なる。以上の研究はすべて重紐問題を『博雅音』の音韻体系の研究の一環とするが、本稿はそれを重紐現象の通時の研究の一環と位置付ける。この研究を通して、紀元 6 世紀末～7 世紀初の南方読書音系統における重紐の特徴を窺う。

¹⁴ 大島 1985(p.78)。

2. 資料処理の方法が異なる。以上の研究は『博雅音』における全ての反切、直音音注が「同質」であることを前提とするが、本稿は反切、直音の体裁によって分けて論ずることを作業仮説とする。

3. 考察の範囲が異なる。以上の研究は重紐韻の範囲を伝統的な「支、脂、祭、真(諄)、仙、宵、侵、塩」の八韻とするが、本稿はそれに加えて「庚三-清、幽、蒸」の四韻を考察の範囲に入れる。そして反切上字に関しては三等字に止まらず、一、二、四等韻字の使用例も考察対象とし、下字に関しては後の韻の合流を考慮して、C類字、四等韻字の使用例も併せて考察の対象に含め、声母に関しても唇牙喉音声母以外の声母字の使用例も対象に含めた。これらの声母において重紐の対立は見られないが、AかBかの音声傾向を見るためである。

§4 考察の結果

本節では筆者の整理した結果を紹介する。

4.1 重紐反切

4.1.1 反切下字

まず、A類、B類反切における下字の分布を見てみよう。結果は表6の通りである。

ここで注意すべきは、イ類には上字のみ記載され、下字の脱落している音注例が2例あるという点である。これにより、百分率を計算する際に、イ類の母数はA類が114であり、B類が166となる。

下字脱落の例：子、吉-；鵬、詭-

		A 類	B 類	C 類	知 組	精 組	章 組	莊 組	日 母	来 母	云 母	以 母	一 等	二 等	四 等
ア	A 類	3	0	0	0	1	3	0	1	0	0	2	0	0	0
	B 類	0	4	1	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0
イ	A 類	26	2	8	0	6	26	0	5	7	0	17	0	2	14
	B 類	2	99	14	10	2	2	0	4	5	13	2	5	3	5

表6 反切下字分布表

舌齒音下字については 4.2 で述べる。以下、まず A 類、B 類下字から説明していく。表 6 で示すように、殆どの A 類、B 類下字はそれぞれ A 類、B 類帰字と対応するが、例外は 4 例ある。注目すべきは例外がすべてイ類に属するものだというのである。

例外反切：

帰字	重紐	上字	重紐	下字	重紐	行数	卷数	頁	表裏
鬻	A	矩		皮	B	10	7	2	表
(女禽)	A	烏		檢	B	1	1	3	裏
戲	B	慙	C	一	A	10	2	3	裏
謬	B	靡	B	幼	A	6	2	4	表

丁鋒 1995 は「𪛗」を幫母至韻 B 類と認めて、「𪛗，彼比」をその唯一の例外とした。これについて、筆者は意見を異にする。理由は帰字の「𪛗」の重紐帰属にある。筆者はここの「𪛗」は重紐 A 類にした方が相応しいと考える。これを証明するには、『広雅疏証』の原文を読まなければならない。なお本稿で使用する『広雅疏証』のテキストは王雲五主編『百部叢書集成』（商務印書館）所収畿輔叢書影印本である。

『広雅疏証』四百三十四頁

否、弗、𪛗、𪛗也

皆一聲之轉也。𪛗者，廣韻𪛗不肯也。𪛗者，方言𪛗不知也。郭璞注云，今淮楚閒語呼聲如非也。曹憲云，彼比俱得。方語有輕重耳。𪛗即不肯之合聲，𪛗即不知之合聲。說文𪛗不成粟也。義亦與𪛗同。

原文を読むと、『広雅疏証』にある「𪛗」は実は「不知」の縮合語であることがわかる。もしも、この「不知」を一種の反切とすれば、「𪛗」は幫母平声支韻のはずである。これを『玉篇』、『広韻』、『集韻』の音注に照らしてみると、以下の字音の存在が確認できる。

『玉篇』：𪛗，蒲戸

義注：略

『広韻』：𪛗，兵媚

義注：惡米。又魯東郊地名。說文作(北*米)

『集韻』：𪛗，頻脂

義注：穀不成也。或从来

このうち『広韻』の例は下字が去声であるため、参考にならない。また『集韻』の例も上字が並母であるため、参考にならない。残る『玉篇』所収音では「蒲」は幫母で、「尸」は平声脂韻章組字であり、最も「不知」に近いと言える。4.2で改めて詳しく説明するが、『博雅音』にある重紐反切における章組下字はA類と共通する音的特徴をもつので、「枇」はA類である蓋然性が高い。

以下、C類、中古一等、二等、四等下字について説明する。データから見ると、C類、中古一等下字と四等下字はそれぞれB類、B類、A類帰字を導く傾向が顕著である。しかし、A類、B類反切における中古二等下字はそれぞれ僅か2例、3例しかないため、傾向を判断することはできない。

4.1.2 反切上字

次に、A類、B類反切における上字の分布を見てみよう。結果は表7の通りである。

		A類	B類	C類	一等	二等	四等
ア	A類	5	0	4	1	0	0
	B類	0	2	4	2	0	0
イ	A類	46	1	47	18	1	1
	B類	10	33	94	28	1	1

表7 反切上字分布表

表7で示すように、A類、B類反切上字は基本的にA類、B類帰字と対応するが、11例の例外が存在する。そして、例外は全部イ類に属するものである。

帰字	重紐	上字	重紐	下字	重紐	行数	巻数	頁	表裏
1 枇	A	彼	B	比	A	4	4	2	表
2 𦵏	B	必	A	昭		10	8	2	表
3 儻	B	必	A	嬌	B	9	6	2	表
4 帔	B	匹	A	媚	B	2	7	3	裏
5 篋	B	民	A	忍		4	10	1	裏
6 滌	B	匹	A	制		6	6	2	裏
7 辨	B	婢	A	典		7	1	2	裏
8 陂	B	必	A	何		5	2	4	表
9 委	B	一	A	偽	B	8	1	2	表

10 𪛗	B	必	A	寄	B	4	5	2	表
11 欠	B	祕	A	憑	B	3	5	2	表

説明が必要なのは、A 類上字の「匹」である。平山 1977 では、「匹」の用法は C 類上字と同じ、即ち「匹+A→A, 匹+B→B, 匹+C→C」だと指摘している。この指摘に従えば、4「帔, 匹媚」は例外とならない。また、「制」は祭韻の章組字であり、『博雅音』においては A 類帰字に対応する下字だと見做すことができる。そのため、「𪛗, 匹制」はやはり例外としなければならない。

また、遠藤 1990 ; 2001¹⁵は平山説を踏まえ、反切上字「匹」のような類相関で C 類上字と同じ働きを持つ、いわゆる「稀少反切上字」の分布を究明した。彼、必、民、婢、一、祕はいずれもこれに属する。従って、ここにある帰字と上字の重紐帰属が違う例は「例外」というよりも、むしろ「稀少反切上字」を使った重紐反切と考える方が相応しいと言えるだろう。しかし、「稀少反切上字」が全てイ類重紐反切に存在する理由は現段階ではまだわからない。これはア類反切とイ類反切の由来が違うことを示唆している可能性もあり、非常に興味深いところである。

4.2 舌歯音音節

舌歯音音節(または AB 類音節)が A 類音節、B 類音節のいずれと共通する音声特徴を持つかという問題は常に重紐研究において一つの難問となる。殊に、知組音節と来母音節の帰属問題については「中性説」と「B 類説」という二種の異説がある。本節では、資料研究の面で『博雅音』における舌歯音音節の帰属を説明する。

平山 1977 は、A 類反切、B 類反切において C 類上字を用いたものを第一式反切とし、帰字の類に合わせて A 類上字(「匹」を除く)、B 類上字を各々用いたものを第二式反切とした。

さらに、平山 1991 は、来母・知組の「性質」を論ずる際に、第一式反切と第二式反切の状況を同時に考慮しなければならないと指摘した。本稿はこの理念に基づいて考察を行う。

		知組	精組	章組	莊組	日母	来母	云母	以母
ア	A 類	0	1	2	0	0	0	0	0
	B 類	0	0	0	0	0	0	1	0

¹⁵ 遠藤光暁『切韻』における稀少反切上字の分布『中国語学』237, pp.1-11、1990 年 10 月 ; 後『中国音韻学論集』, pp.54-66、白帝社、2001 に収録。

イ	A 類	0	2	10	0	1	4	0	10
	B 類	5	0	0	0	2	5	10	1

表 8.1 第一式反切舌歯音音節分布表

		知組	精組	章組	莊組	日母	来母	云母	以母
ア	A 類	0	0	0	0	1	0	0	2
	B 類	0	0	0	0	0	0	0	0
イ	A 類	0	3	14	0	4	3	0	7
	B 類	3	2	0	0	1	0	2	1

表 8.2 第二式反切舌歯音音節分布表

ア類のデータは量的に少ないため、傾向を判断するには至らない。ここではイ類のデータのみを考察する。第一式反切と第二式反切を合算してみれば(該当する例が 0 である莊組を除く)、精組、章組、日母、以母は A 類音節に近く、知組、云母は B 類音節に近いことが明らかであるが、来母に関してはデータ上 A 類がやや優勢であるようにも見えるものの、やはりこの優勢の傾向があまりに微弱で有力な根拠にならない。従って、『博雅音』における来母音節の帰属は従来の「中性説」に従う。

4.3 小結

以上、重紐反切における下字と上字について考察を行った。結論として、ア類反切では下字と上字は共に反切帰字の帰属を決定することができる。例外はない。イ類反切では下字と上字はア類と同様に共に反切帰字の帰属を決定することに関わっているが、例外がある。下字の例外率は $(2+2) \div (26+2+2+99) \approx 3\%$ であり、上字の例外率は $(1+10) \div (1+10+46+33) \approx 12\%$ である。「稀少反切上字」の観点から見ると、上字の例外率は $1 \div (1+10+46+33) \approx 1\%$ となる。このように計算すれば、イ類反切における下字の例外率は上字より高いと認められ、重紐の区別能力は上字よりやや低いということになる。

何れにせよ、例外率は少し異なるが、下字と上字が共に反切帰字の帰属を決定することに関わっていることはア類反切とイ類反切に共通する特徴である。音声学的観点から言えば、このような構造上の特徴は、恐らく A 類、B 類の根本的な違いが「拗介音」にあることを物語っているであろう。つまり、実際に発音するときに、頭子音と主母音に同時に二次的調音的な影響を与えている「要素」が存在する。その「要素」は「拗介音」しかない。音声学上、二重調音が

なされるとき、主要な方を一次的調音と呼び、補助的な方を二次的調音と呼ぶ。二次的調音には唇音化、口蓋化、軟口蓋化、咽頭化があるが、ここでは口蓋化を意味する。つまり、発音する際に「拗介音」の同化作用により、頭子音は口蓋化され、主母音は狭くなると理解する。勿論、口蓋化する程度は「拗介音」の種類によって変わる。

但し、声母と韻母の通時的変遷に従って、介音が声母と韻母に与えている影響も変わっていく。重紐反切の構造では、帰字-下字、帰字-上字の相関関係の変化でこの通時的変遷を表す。これについて、次節で説明する。

§5 通時的位置付け

李秀芹 2006¹⁶は、『經典積文』、『切韻』、『慧琳一切經音義』、『説文解字繫伝』¹⁷、『広韻』、『集韻』という六種の資料における重紐反切を観察し、中古重紐の基本的特徴を三つの法則と二つの規則として帰納している。また、これに基づいて、中古重紐を「『切韻』、『積文』」型（『広韻』はこの型に属する）、「『慧琳音義』、『集韻』」型、「『朱翱反切』」型という三つの類型に分けている。この三つの類型がどういう特徴を持っているのかということについては以下で説明を加える。本節では李説に照らして『博雅音』における重紐対立の通時的位置付けを確かめる一方、C 類下字、中古四等下字、中古一等上字など個別の問題を議論する。

5.1 三つの法則と二つの規則¹⁸

本節では李秀芹 2006 が中古重紐の基本的特徴とした三つの法則と二つの規則を詳細に紹介する。¹⁹

三つの法則

1. A 類、B 類上字決定法則：反切上字が B 類または A 類である場合、反切上字によって帰字の重紐帰属を決定することができる。
2. 下字区別法則：早期反切の体系では、上字に関係なく下字によって帰字の重紐帰属を決定することができる。具体的に言えば、A 類、以母、精組、章組下字の場合、帰字は A 類であり、B 類、云母、知組、来母下字の場合、帰字は B 類である。注意すべきは、下字区別法則が反映しているのは早期反切におけ

¹⁶ 浙江大学博士学位論文、論文名は『中古重紐類型分析』。

¹⁷ 以下、『朱翱反切』と略称。

¹⁸ 李秀芹 2006(pp.157-159)における用語は「三条規律和两条規則」である。「規則」は「規律 1」と「規律 2」から派生したものであり、早期の重紐反切の特徴を表す。本稿では「規律」と「規則」を区別するため、前者を「法則」と呼び、後者を「規則」と呼ぶ。

¹⁹ 三つの法則と二つの規則に関する説明は同論文の pp.1-2, pp.157-159 を参照。

る重紐の特徴だということである。

3. 上字、下字同時決定法則：反切上字と下字は共に帰字の重紐帰属を決定することができる。構造上、高い「調和度」が見られる。

二つの規則

1. A 類、B 類上字決定法則は下字区別法則より優先されるという規則：A 類、B 類上字と下字の類が一致しない場合、上字によって帰字の類を決定することが一般的である。

2. 下字の重紐判定関与度は A 類、B 類上字より高いという規則：帰字の類を決定する数から言えば、重紐反切における下字は A 類、B 類上字より多い。

李秀芹 2006 は以上の法則と規則に基づいて、本節冒頭で指摘したように、中古重紐を三種類に分けている。それぞれの特徴は以下の通りである。

1. 『切韻』、『釈文』型

完全に法則 1、法則 2 及び規則 1、規則 2 に合う。但し、法則 3 に合う反切の数は大変少ない。

2. 『慧琳音義』、『集韻』型

三つの法則と二つの規則に合う。殊に、反切上字と下字の「調和度」が高いところが顕著に見られる。

3. 『朱翱反切』型

法則 1 にのみ合い、完全に上字によって帰字の帰属を決定する。

5.2 『博雅音』の場合

5.1 において李秀芹 2006 の理論を紹介した。本節はそれに基づいて『博雅音』における重紐の対立の通時的位置付けを議論する。

既に 4.3 で論じているように、ア類、イ類重紐反切における A 類、B 類上字の決定率(例外率の反義語)はそれぞれ 100%、99%²⁰であるため、両方とも法則 1 に合うことがわかる。改めて表 6 を観察すれば、ア類、イ類における重紐反切が比較的異なる特徴を反映していると見てとることができるであろう。つまり、ア類重紐反切の場合、A 類、精組(日母を含む)、章組、以母下字は A 類的な性格を表し、B 類、C 類、云母下字は B 類的性格を表すので、法則 2 に合うと判断できる。また、反切上字全般からみると、ア類重紐反切の場合、A 類、B 類上字以外、重紐帰属が明白でない C 類上字 8 例、中古一等上字 3 例がある

²⁰ イ類重紐反切における A 類、B 類上字の例外率は 1%なので、決定率は 99%である。

ため、法則 3 には合わないと判断できる。もちろん、ア類重紐反切では上字 A 類、下字 B 類、あるいは上字 B 類、下字 A 類の事例がないので、規則 1 を検証できないけれども、規則 1 に違反する事例はないことも認めるべきである。最後に、ア類重紐反切における下字の決定率は $(3+4+1+2+3+1+2) \div 18 \approx 89\%$ であり、A 類、B 類上字の決定率は $(5+2) \div 18 \approx 39\%$ であり、規則 2 に合う。以上、『博雅音』におけるア類重紐反切は中古重紐の早期型、つまり『切韻』、『釈文』型だと判断できる。

ア類重紐反切に対し、イ類重紐反切の場合はやや複雑である。上で説明したように、イ類重紐反切は法則 1 に合うけれども、法則 2 には合わない。何故ならば、李秀芹 2006 で提示された法則 2 の基準と異なり、イ類重紐反切における C 類、日母と来母下字の重紐帰属は明白ではないからである。これで、法則 2 に合わない以上、李秀芹 2006 の方法でア類重紐反切の類型を判断することが困難になり、別の角度から議論せねばならない。

C 類下字と中古四等下字の使用状況を観察すれば、この二種の下字を取った A 類、B 類反切の比は 8 : 14 と 14 : 5 である。つまり、C 類下字と中古四等下字はそれぞれ B 類下字的、A 類下字的に取られる傾向が見られるが、まだ完全に合流しているとは言えない。むしろ、合流の萌芽が見られると考えた方がよい。従来の研究で既に究明した通り、中古早期の資料で C 類下字はあまり見られず、且つ A 類反切の下字となる事例がメインである。中古中期の『慧琳音義』では B 類反切の下字として使うようになっている。これと似ているのは、中古四等下字である。中古早期の資料では重紐反切に中古四等下字を使うことはほとんど無いが、『慧琳音義』では下字として大量に使うようになっている。従って、イ類重紐反切に表れる C 類下字と中古四等下字の使用状況は『切韻』が代表する中古早期より遅く、『慧琳音義』が代表する中古中期より早い時代の特徴を反映していると判断できる。また、『博雅音』の成立時代を考慮すれば、中古早期の側に近いと判断できる。注意すべきは、ア類重紐反切よりも、イ類重紐反切の方がやはり更に革新的であるという点である。これもア類反切とイ類反切は由来が異なることを物語っているのではないか。

以上述べて来たことを総合し、一部中古早期以降の特徴も見られるけれども、全体的に言えば『博雅音』における重紐の対立の通時的位置は中古早期であると判断する。

5.3 中古一等上字について

重紐反切における中古一等上字は数が少ないものの、その特徴は吟味に値する。李秀芹 2006(pp149-151)はこれについて考察を行い、中古一等上字は C 類上

字と近似すると結論づけている。本節は、資料の補充を目的として、『博雅音』の重紐反切における中古一等上字の使用状況を報告する。

統計の結果、『博雅音』における重紐反切に中古一等上字を取った事例は総計 49 例(全体の 16%)である。その分布状況は以下の表 9 の通りである。

下字 帰属		A	B	C	知	精	章	莊	日	来	云	以	一	二	四
		類	類	類	組	組	組	組	母	母	母	母	等	等	等
ア 類	A 類	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	B 類	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0
イ 類	A 類	5	1	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	9
	B 類	0	15	4	2	0	0	0	0	0	1	0	2	2	2

表 9 中古一等上字分布状況

表 9 を見ると、下字の種類によりまだ不安定な分布が見られるものの、基本的に中古一等上字を取った重紐反切は下字の重紐帰属の傾向に従って帰字の重紐帰属を決定することがわかる。しかし、これはあくまでも『博雅音』における重紐反切に反映されている特徴に過ぎず、中古重紐全体に広げることにはできない。李秀芹 2006 によれば、中古一等上字を取った重紐反切は実は量的に少なく、傾向も明白ではない。筆者はこれについて、恐らく中古一等字の音韻変化の結果が重紐反切に反映しているのではないかと考えている。この点に関しては、一つの資料では解釈し難いので、重紐韻の変化の一側面として今後の研究に譲る。²¹

§6 直音の実態

2.1 で述べたように『博雅音』における A 類、B 類直音音注(ウ類、エ類、オ類)は合わせて $1+8+158=167$ 例である。

考察の結果によれば、直音音注では A 類、B 類を混同する事例はなく、厳密に使い分けている。しかし、オ類直音には C 類直音字を取った A 類帰字が 3 例(全体の 5%)と、B 類帰字が 11 例(全体の 11%)見られる。また、中古四等直音字を取った A 類帰字は 8 例(全体の 13%)、B 類帰字は 2 例(全体の 2%)見られる。

以上の事実から、A 類と中古四等、B 類と C 類との合流が窺われよう。しか

²¹ 張渭毅 2005 『再論集韻的洪細』は、『集韻』における一等上字の拗介音の有無について論じている。本稿と直接的な関係はないが、今後の研究の一参考として提示しておく。

し、例外の数量は、どの合流についても明瞭な傾向と判断できるほどではない。従って、この二種の合流はやはり萌芽の段階であると言えない。

§7 『玉篇』、『文選音義』との比較

『博雅音』の基本音韻体系は隋代の江南讀書音体系であるため、資料が反映している重紐の対立状況は隋代の江南讀書音体系における重紐の特徴だと考えられる。典型的な江南讀書音資料としては、『玉篇』と『文選音義』が挙げられる。年代的に、『博雅音』は『玉篇』と『文選音義』の中間に位置づけられる。大島 1985(pp.76-78)は、『博雅音』が反映する音韻的特徴を『玉篇』、『文選音義』と比較し、「音韻的特徴は多く『文選』と齊しくし、『玉篇』とは極一部の声・韻類に関して特徴を共にするのみで両者間には音韻上大きな乖離が在る」と結論を出している。しかし、大島 1985 の比較は『博雅音』に見える通用例から見た音韻論的特徴の比較であり、重紐の対立状況の比較は行なっていない。本節では、この比較作業を扱うことにする。『玉篇』と『文選音義』の情報はそれぞれ欧陽国泰 1987(pp.88-93)、大島 1981(p120,pp.134-135)を参考にする。²²

7.1 『玉篇』との比較

欧陽国泰 1987 は、原本『玉篇』における重紐の特徴を以下の三点にまとめている。

1. C 類は重紐 B 類に近く、中古四等は重紐 A 類に近い。
2. 重紐 B 類は唇牙喉音下字を多用しているが、重紐 A 類はそのような傾向はない。
3. 知組、莊組は重紐 B 類に近く、章組、精組は重紐 A 類に近い。

以上の三点を逐条毎に『博雅音』と比較すると、

1 について、『博雅音』でも同じ事象が見られるが、該当する音注は量的に少ない。

2 について、『博雅音』で唇牙喉音下字の使用回数は、ア類反切の場合、重紐 A 類は 3 例(全体の 3%)、重紐 B 類は 5 例(全体の 63%)である；イ類反切の場合、重紐 A 類は 37 例(全体の 32%)、重紐 B 類は 118 例(71%)である。

3 について、『博雅音』では、統計数値から見ると、知組は B 類に近く、章組と精組は A 類に近い。

以上、比較の結果からみると、重紐の特徴に関して『博雅音』と原本『玉篇』

²² 管見の及んだ先行研究では、両資料との比較項目はこれと同じではない。

はかなり類似性が高い。

7.2 『文選音義』との比較

大島 1985 は、『文選音義』における重紐の特徴を以下の二点にまとめる。

1. 唇音重紐反切で第一式反切(24 例)は第二式反切(22 例)より多い。
2. 牙喉音重紐反切で第一式反切(33 例)は第二反切(79 例)より少ない。

『博雅音』と比較すると、

1 について、唇牙喉音反切で第一式反切(ア類 1 例+イ類 27 例)は第二式反切(ア類 6 例+イ類 55 例)より少ない。

2 について、牙喉音重紐反切で第一式反切(ア類 7 例+イ類 114 例)は第二式反切(ア類 1 例+イ類 24 例)より多い。

以上、比較の結果からみると、重紐反切の構造では『博雅音』と『文選音義』は正反対の様相を表している。

従って、音韻体系全体から見ると、『博雅音』の音韻的特徴は『文選音義』に近く、『玉篇』とは大きく乖離するという結論が得られているが、重紐に関する部分についてはこれとはかなり異なる様相が見られる。しかしながら、これはあくまでも数値に反映する特徴に過ぎず、単字音の変遷については、また個々の音注間の異同を比較、検討しなければならない。

§8 おわりに

李秀芹 2006 は中古重紐の時間軸に沿った変化の方向と時間軸上の座標を確定している。しかし、重紐問題を発生から終焉まで徹底的に究明するためには更なる緻密な研究が必要である。本稿はこのような研究の一環となることを目指している。

本稿は『博雅音』における重紐の対立をめぐって多面的に考察を行った。その結論として、次の四点が挙げられる。第一に、重紐反切における A 類、B 類下字と上字は基本的にそれぞれ A 類、B 類帰字に対応する。第二に、A 類と中古四等、B 類と C 類との合流の萌芽が見られる。第三に、『博雅音』における重紐の対立は中古早期に位置づけられる。第四に、重紐の対立で『玉篇』とは類似性が高いが、『文選音義』とは反切の構造上の相違点が見られる。また、舌歯音音節及び喉音音節の以母、云母の重紐帰属に関して、精組、章組、日母、以母は A 類音節に近く、知組、云母は B 類音節に近く、そして来母音節は「中性的」であることが確認された。重紐の問題以外にも、中古音の体系的変化に

関わる問題にも若干説き及んだ。それは中古一等上字の問題である。しかし、このような問題を解明するには、一種の資料だけでは解決できず、多様な資料に通じ、中古音全体に目を配らなければならない。そのため、この未解明の問題は今後の研究に譲りたい。

§9 附論

本稿は「ア類反切とイ類反切は由来が異なる」という作業仮説によって論考を展開した。その裏付けに関して、既に文中で三点を挙げている。

1. ア類反切には分布上の特異性は見られない。
2. 帰字-下字、帰字-上字の相関関係の例外はイ類反切でしか現れない。
3. 中古四等と A 類との合流事例はイ類反切でしか見られない。

本節ではこの作業仮説の合理性を高めるために、以上の三点以外にもう二点を補充しておきたい。

4. 重唇音と軽唇音の混用

大島 1985(p.49)によれば、重唇音・軽唇音の混用例は合計 24 例ある。

①婁，匹萬；②屏，福郢；③彬，福巾；④(走并)，方孟；⑤賊，方支；⑥錚，方支；⑦簠，方千；⑧伾，芬悲；⑨臍，孚二；⑩(才票)，孚堯；⑪慙，芳列；⑫毗，符夷；⑬埤，符彌；⑭頻，符賓；⑮愎，符逼；⑯辟，符役；⑰紕，符夷；⑱絳，扶江；⑲(月牟)，扶江；⑳檣，扶支；㉑紕，扶規；㉒臍，扶四；㉓裨，浮夷；㉔便，房連。

これらのうち、ア類反切では「10.(才票)，孚堯」1 例しか見られず、それ以外の 23 例は全てイ類反切に現れる。それぞれの唇音反切に占める百分率を計算すると、前者は 3%、後者は 6%である。イ類反切の場合はア類反切の 2 倍となっている。

5. 尤、幽兩韻の混用

筆者の考察結果によれば、尤、幽兩韻の混用例は 4 例ある。それらは、ア類反切では 0 例、イ類反切では 4 例現れる(うち 1 例は両方に見える)。

- ① 𪛗，子幽；(大島 1985 は「千幽」)；②彪，必鄒；
- ③黝，於久；④黝，於柳。

以上、「ア類反切とイ類は由来が異なる」という仮説を支える事例を二点補充した。勿論、これで本稿の仮説が 100%正しいと断言できる訳ではない。ア類反切とイ類反切がたまたま以上の五点の事例を示すことになっている可能性もゼロではない。しかし、以上の五点及び「反」の有無はかなり客観的な事実

であるため、本稿の作業仮説に一定の合理性があることも否定できない。

贅言としてもう一点提示しておきたい。以上の五点では、第3点と第4点から見ると、イ類反切はア類反切より「革新的」であると判断すべきである。しかし、歴史的には反切の体裁から言えば、反切上、下字の後に「反」を伴う「反切」の方が「反」がない上、下字だけのものより「革新的」である。この点では、矛盾が生じる。現時点では円滑に解釈できる説は提示できないが、これもまた残された未解決の問題として今後の研究に譲りたい。

参考文献

(日本語文献は著者名のアイウエオ順、中国語文献は著者名のピンイン順)

I 類資料(テキスト類)

上田 正『切韻諸本反切総覧』、均社、1975、222pp.

上田 正『玉篇反切総覧』、私家版、1986、563pp.

陈彭年等，艺文印书馆校订『校正宋本广韵』，艺文印书馆泽存堂影印本，1967，144pp.

曹宪，王念孙校订『博雅音』，主要依据畿辅丛书零本，发行时间无考，45pp.;另参考王云五主编丛书集成初编所收畿辅丛书本，商务印书馆影印，1939，1册，pp.1497-1585

丁度『集韵』，扬州使院重刻楼亭藏本，北京市中国书店影印本，1983，3册，1634pp.

龙宇纯『韵镜校注』(底本为古逸丛书本)，艺文印书馆，1960，318pp.

张揖，王念孙校订『广雅疏证』，丛书集成初编所收畿辅丛书本，商务印书馆影印，1939，8册，1495pp.

II 類資料(論文、著書類)

遠藤光暁 1989「切韻の韻序について」『藝文研究』54、pp.312-299；後『中国音韻学論集』白帝社、pp.98-118、2001 所収

遠藤光暁 1990『『切韻』における稀少反切上字の分布』『中国語学』237、pp.1-11；後『中国音韻学論集』白帝社、pp.54-66、2001 所収

大島正二 1976「敦煌出土礼記音残卷について」『東方学』52、pp.46-60

大島正二 1981『唐代字音の研究』、汲古書院、365pp.+759pp.

大島正二 1984「曹憲『博雅音』考：隋代南方字音の一樣相(上)」『北海道大学文学部紀要』32(2)、pp.1-113

大島正二 1984「曹憲『博雅音』考：隋代南方字音の一樣相(上) [補稿]」『北海

- 道大学文学部紀要』33(1)、pp.35-237
- 大島正二 1985「曹憲『博雅音』考：隋代南方字音の一樣相(下)声類・韻類について」『北海道大学文学部紀要』34(1)、pp.47-81
- 太田 斎 2012『韻書と等韻図』、神戸市外国語大学外国学研究所、258pp.
- 木村公直 1989「曹憲『博雅音』における止摂の分合について」『均社論叢』16、pp.1-5
- 佐々木 猛 1983「庚清韻贅説」『伊地智善繼・辻本春彦両教授退官記念 中国語学・文学論集』東方書店、pp.392-438
- 城生佰太郎、福盛貴弘、斎藤純男 2011『音声学基本事典』、勉誠出版、540pp.
- 辻本春彦 1954「いわゆる三等重紐の問題」『中国語研究会会報』24；後『均社論叢』5-1(Vol.6)、pp.66-70、1978.3 に再録；また『附諸表索引 広韻切韻譜面』森博達編 2008.3、276p.では岩田憲幸氏による中国語訳 pp.254-251(逆)を附して pp.259-255(逆)に再録。
- 平山久雄 1966「切韻における蒸職韻と之韻の音価」『東洋学報』49-1、pp.42-68
- 平山久雄 1972「切韻における蒸職韻開口牙喉音の音価」『東洋学報』55-2、pp.64-94
- 平山久雄 1977「中古音重紐の音声的表現と声調との関係」『東洋文化研究所紀要』73、pp.1-42
- 平山久雄 1991「中古漢語における重紐韻介音の音価について」『東洋文化研究所紀要』114、pp.1-41
- 丁鋒 1995『『博雅音』音系研究』、北京大学出版社、194pp.
- 董忠司 1973『曹憲博雅音之研究』國立政治大學中國文學研究所碩士論文、888pp.
- 黄典誠 1986「曹憲『博雅音』研究」、『音韵学研究』第二輯、中华书局、pp.63-82
- 雷昌蛟 1996「博雅音声类考」、『贵州大学学报<社会科学版>』第1期、pp.100-82
- 雷昌蛟 1999「『博雅音』中的特殊音切」、『遵义师范高等专科学校学报』、第1卷第1期、pp.42-45
- 李秀芹 2006「中古重紐类型分析」浙江大学博士论文、223pp.
- 欧阳国泰 1987「原本『玉篇』的重紐」、『语言研究』第13期、pp.88-93
- 吴波 2006「『博雅音』及其音系性质问题」、『汉语史学报』第6輯、pp.166-172
- 吴波 2009「『博雅音』的唇音分合问题」、『中国语文』第332期、pp.466-471
- 周法高 1989「隋唐五代宋初重紐反切研究」、中央研究院历史语言研究所集刊第23本、pp.385-407
- 张渭毅 2005「再论集韵的洪细」、『汉语史学报』第5輯、上海教育出版社、pp.230-254

效攝	宵 a										
	小 a										
	笑 a										
深攝	侵 a										
	寢 a										
	沁 a										
	緝 a										
咸攝	鹽 a										
	琰 a										
	艷 a										
	葉 a										
梗攝	清 a										
	靜 a										
	勁 a										
	昔 a										
流攝	幽 a	麤必幽 麤香幽									
	黝 a										
	幼 a										
韻類	聲類	唇音				牙音				喉音	
		幫	滂	並	明	見	溪	羣	疑	影	曉
止攝	支 b										
	紙 b										
	寘 b	賁彼寄									
	脂 b										
	旨 b										
	至 b										
蟹攝	祭 b										
臻攝	真 b	(分 l) 眞 (分 l) 布仁							閭魚斤		
	軫 b										
	震 b										
	質 b				宓眉筆						

	諄 b										
	準 b										
	稕 b										
	術 b										
山攝	仙 b										
	獮 b										
	線 b										
	薛 b										
效攝	宵 b										
	小 b										
	笑 b										
深攝	侵 b										
	寢 b										
	沁 b										
	緝 b										
咸攝	鹽 b						鉅巨炎				
	琰 b							驗魚淹			
	艷 b										
	葉 b										
梗攝	庚 b						劬巨京				
	梗 b										
	映 b										
	陌 b										
流攝	幽 b										
	黝 b										
	幼 b										
曾攝	蒸 b										
	拯 b										
	證 b										
	職 b										

表 3 ア類重紐字単字音表

2.2.2 イ類

聲類 韻類		唇音				牙音				喉音	
		幫	滂	並	明	見	溪	羣	疑	影	曉
止攝	支 a	婢方支		裨浮夷 紙扶規 埤曾計 紙布寐 柳扶支 埤符彌		霽矩皮	窺苦垂	軋渠夷 越巨支			鑑乎規 鑑況規
	紙 a		訛匹夷 (言卑)匹爾 疍匹弭		休込是						
	寘 a					(目規)居恚	跂去政				
	脂 a		(言望)布兮 (糸望)布兮 茈婢之	紙符夷 毗符夷 毗彼比							映火尸 惟許惟 睢許佳
	旨 a		毗鼻之					嬰具癸			
	至 a	痹必異 庇不異	埤毗利					瘳揆季			
蟹攝	祭 a								執魚世		
臻攝	真 a		翺匹人	頻符賓							
	軫 a					緊居忍					
	震 a										
	質 a			埤毗栗 鄧白必 鄧曾必			蛄去吉				故許一
	諄 a										
	準 a										
	稕 a					吻鈞峻					
	術 a					醺巨出					

	靜 a	餅必井 餅必整								瘦於整	
	勁 a	摒必政		庠必整							笈呼性 詞呼詔
	昔 a	襲必益	辟浦壁 辟匹亦	革婢亦 辟符役							
流攝	幽 a	彪必鄒								呦於糾	
	黝 a									黝於糾 黝於糾 黝於久 黝於柳	
聲類 韻類	唇音				牙音				喉音		
	幫	滂	並	明	見	溪	羣	疑	影	曉	
止攝	支 b	陂必何	帔匹媚	糜靡皮 (麻*分)靡互 糜目羈 (靡*火)莫知 糜無悲 糜無悲		(夕奇)邱知 蹲車美			瘠於綺 (夕委)於危 痿於危 覲於危 猗於互 (夕委)委媚 (夕委)於為 陶於靡 委一偽 委於悲	戲慙一 鳴欽危	
	紙 b	彼化彼			踣居綺 踣居綺 踣居綺 媿牛委 歧古委 (危鳥)古彼 媿古彼 歧古彼 媿古彼 制車奇	(ɟ~*奇)於綺	綺奇綺	螳五綺 螭五綺	倚於綺		

	稇 b										
	術 b										
山攝	仙 b					嘍去焉 穠去焉	拳卷權		薦於然		
	獮 b			辨婢典	(糸虔)居件 拳九件 羣俱萬 羣古萬		圈奇勉 鍵奇辨	遮魚輦			
	線 b				藉古免						
	薛 b				褐居曷 孑雞節 褐居列		檻巨例 槩御別	槩立別 槩御別		斐丈例	
效攝	宵 b	儻必嬌 鑣不沃 濃彼苗 蔗布苗			摘几消 摘居夭	趨去遙	轡奇朝		祔於嬌 妖倚姚 夭於苗	囁呼嬌	
	小 b	姦必昭	(牙咎)口亮 歡其表		摘几小 轡奇兆 居夭				(步夭)於表 夭於表		
	笑 b	裱筆廟					轡奇廟				
深攝	侵 b						擒古會 黔巨琴 聆郎丁		暗於今		
	寢 b						顛巨錦 顛渠領				
	沁 b						紛騎禁 紛渠禁				
	緝 b				汲九及			(步立)宜及 岌魚及	飽於劫	吸許急 翕許及 翕虛及	
咸攝	鹽 b						鉗奇炎 拊巨炎 黠古間		醺於炎		

	琰 b								(方%因) 於劫 (方%因) 於檢	
	艷 b	窆碑艷								
	葉 b								(糸劫) 於輻	
梗攝	庚 b		併音耕					擎渠迎		
	梗 b	蛎步幸				驛古永 固古丙			饒於敬	
	映 b	窮符命 窮補命		桴平命					諛於敬	
	陌 b							履渠戟 劇其御	獲於號	
流攝	幽 b			滌蒲彪						
	黝 b									
	幼 b				謬靡幼					
曾攝	蒸 b	欠祕憑								
	拯 b									
	證 b									
	職 b	颺步力 福皮逼		(福*火) 貧 力 復符逼						

表 4 イ類重紐字単字音表

2.2.3 ウ類

倚(羣母紙韻 B 類)-寄(見母真韻 B 類)

2.2.4 エ類

(イ 賓)(幫母真韻 A 類)-賓(幫母真韻 A 類)、裨(幫母支韻 A 類)-脾(並母支韻 A 類)、裨(幫母支韻 A 類)-卑(幫母支韻 A 類)

呬(並母庚韻 B 類)-平(並母庚韻 B 類)、誼(曉母紙韻 B 類)-毀(曉母紙韻 B 類)、賺(疑母琰韻 B 類)-檢(見母琰韻 B 類)

賺(疑母琰韻 B 類)-斂(來母琰韻)、驚(明母軫韻 B 類)-敏(明母軫韻 B 類)

2.2.5 才類

聲類 韻類		唇音				牙音				喉音	
		幫	滂	並	明	見	溪	羣	疑	影	曉
止攝	支 a	裨卑		裨卑 (麥比)毗	彌彌	提規 铸規		芪祇			
	紙 a			庫婢	溺弭						
	真 a										
	脂 a			比鼻 比鼻 貌毗				鮎普 雛佳 鷄葵		夥伊	
	旨 a	匕化									
	至 a						企棄 結棄				
蟹攝	祭 a			冏敝 冏弊					執再		
臻攝	真 a	(賓頁)頻		獮頻						烟因 湮因 輶因 裊因	
	軫 a										
	震 a										
	質 a	(女畢)畢 章必 緝必 緝畢 單畢 趨畢	鳴匹		醯蜜						歆虐
	諄 a										
	準 a										
	稕 a										
	術 a					綺橘					
	仙 a		編篇	(虫便)便							嬾淵
	獮 a				佃面		鎚遣				

	線 a										
	薛 a			滅滅	釘子						
效攝	宵 a	杓杓									
	小 a										
	笑 a										
深攝	侵 a										
	寢 a										
	沁 a										
	緝 a										
咸攝	鹽 a										
	琰 a										
	艷 a										
	葉 a										
梗攝	清 a	簫瓶								搜嬰	
	靜 a			昭茗		嶺狄					
	勁 a		娉聘								
	昔 a	(辟 * 止) 壁	癖壁	(夕辟) 壁 (夕辟) 壁 辟避 (骨辟) 臂 闕辟							
流攝	幽 a										
	黝 a					趙糾				蝟幽	
	幼 a										
韻類	聲類	唇音				牙音				喉音	
		幫	滂	並	明	見	溪	羣	疑	影	曉
止攝	支 b	(彳卑) 俾 筭俾	鉞披 被披				螭伎	趙企 琦奇	宜宜	(多委) 委 禕暉 禕草	戲義
	紙 b						(ㄱ) 支) 企		敵蟻	執委	殿毀 烜烜

						嬌綺				
	真 b									
	脂 b		胚丕		(兒 微)眉 微眉	路遠	應兀 歸歸	煩求 駭遠		
	旨 b	痞否				顛遠				
	至 b	(目必)祕 眈祕 眈祕 秘祕 秘祕			媚媚 媚媚	饒奇				
蟹攝	祭 b					蹶厥	揭竭			
臻攝	真 b				鎔旻 鎔旻		董謹		齏淵	
	軫 b									
	震 b									
	質 b	澤筆		弼弼						
	諄 b									
	準 b									
	稕 b									
	術 b									
山攝	仙 b					勸脊	嬌拳 僂拳 捲權 顛權 嬌權 肴權 臘權 (𠂔×皿)眷 鯪虔		嫫淵	
	獮 b					(才善)膳 韋卷 塞塞				

曾攝	蒸 b	棚冰									
	拯 b										
	證 b										
	職 b										

表 5 才類重紐字單字音表